

BATTLE BALLER

HARUKA

I - 4

美しき刺客

(後編)

Ψ

バトルボーラーはるか

第一集

バトルボール(神気珠玉)

第5章

鍵

(後編)

作・ Ψ (Eternity Flame)

はるか達が天神社へ下って行くと、通称“姫宮(ひめみや)さん”と呼ばれる、女性の陰部を模(も)した大岩の、ほの暗い奥の部位に赤く神山文字が浮き上がっていた。

「これは何て読むの...？」

「[泰山(たいざん)に大岩あり大剣に大技もて此(こ)れを砕かん]だな。」

「神山文字って日本語読みなの？」

「ローマ字みたいにして和名を現してるんだ。ヘブライ語なら横書きの筈(はず)だし、おそらく平仮名ができるまでは、これがその役目を果たしてたんだろうな。そうじゃないとさっきの言葉といい、読めないからな。」

「そっか、それでこの言葉はどういう意味なの？」

「メテオカリバーはおそらく大きな剣なんだろうな。この文脈から察するとそうなる。大きな剣にはそれに見合った使い方をしろって所かな...？」

「うーん...そうなんだー...」

釈然(しゃくぜん)としない様子のはるかであったが、今度は中腹の八坂神社から炎が光り出したので、ひとまずそちらへ向かう事にした。

「ここ、昔お花見で一緒に着たわよね。」

「ああ。」

八坂神社の周辺には花見座敷があり、その入口からそれる形で境内(けいだい)があり、その鳥居には荒縄で作られた茅(ち)の輪が結び渡されていた。

「あっ！？鳥居の輪っかの中が、まっ暗になってる！！」

「何ッ？これはどういう事だ??？」

「教えてさしあげましょうか？」

花見座敷の方から一人の僧がはるか達に語りかけてきた。

「お坊さん、どうやってここに？」

「拙僧(せつそう)は、先祖代々この地で禅(ぜん)の修業を行っておる者で、法名(ほうみょう)を純厳(じゅんごん)と申します。」

はるかの問いかけに、見当違いの返答をする僧侶。秀樹がその正体を暴こうと問いつめた。

「アンタ、禪の修業を先祖代々と言ったが、禪僧は子供なんか作らないぜ。本性を現したらどうなんだ？」

「まあまあ、そうおっしゃらず拙僧について来なされ。」

またまたはぐらかすような口ぶりに、秀樹はイラついていたが、あからさまに敵とも判明しない相手に腕づくという訳にも行かず。渋々、はるかと純巖の後に従い、花見座敷の先の神武天皇像(じんむてんのうぞう)のある場所に向かった。

「この立像がどうかしたのか？」

秀樹がそう言って純巖を問い詰めようとする、神武天皇像の周りから禍々(まがまが)しい黒い霧が立ち籠めた。

「何だこれは...!？」

「お兄ちゃん、危ないッ！！」

驚いている秀樹の間隙(かんげき)を縫って、大きな黒い三日月形の刃のような物が襲ってきたッ

「くッ!？」

かろうじて躲(かわ)した秀樹。

「しくじったか...」

「何者だッ！貴様！！」

突如(とつじょ)、暗雲が広がり、その頂きに黒いローブをまとった骸骨が現れた一ツ。

「我が名は死国嘔女(しこくおうじょ) 幽畏(ゆい)じゃ。」

「死国嘔女 幽畏...アンタが、大昔にこの徳島を支配してたっていう悪魔か？」

「小童(こわっぱ)が凶に乗りおって、口を慎(つつし)むがよいッ！まずは貴様から血まつりに上げてやるわ。我が僕(しもべ)、純巖よ！真の姿を見せよ！！」

僧侶である筈の純巖の首が二つに分かれ、ハゲた細目の丸顔のオヤジと、モコモコ白髪頭のいやらしい目つきをした老夫の顔とが現れたッ。

「気持ち悪い...」

二つの顔が一つの体に現れたのよりも、性格の醜(みにく)さが滲(にじ)み出た人相に、はるかは悪寒(おかん)を感じている。

「お兄ちゃん、あの骸骨(がいこつ)とキモい顔の...一体何なの？」

「とりあえず退くぞ。」

二人が飛んで距離をとると、純巖は巨大化し、双頭(そうとう)の狼のような化物に変身しはじめた一ツ。

「あれは...!?!」

「はるか。」

「何？お兄ちゃん。」

「その昔、邪馬台国が出来る以前の徳島は魔物が支配していた。呪術国家と言われた邪馬台国は、魔物の輩を倒し封じ込める、方術と武術を用い国家の基盤を作っていた。その時代の魔物の総大将が幽畏。奴は汚れた人間を生贄(いけにえ)として魔獣を生み出し、それに乗って悪事を働いていたと言う。」

「汚れた人間？」

「数年前に名字は忘れたが、流巖(りゅうごん)という仏僧(ぶっそう)と純柄(じゅんぺい)というキリスト教徒の、どちらも詐欺まがいの悪さをしてた男二人が、ほぼ同時期に不可解な言動を残し、社会から姿を消した。俗に言う、“波動が来た・基準が上がった事件”。あの二つの顔は新聞に出てたから、どこかで見た顔だとは思ってたんだが...一匹の魔獣となり、二人の体と人格が一体となっていたから気付けなかった。もう少し早く気付いてれば、あんな手強そうな獣になる前に何とかできてたのにな。」

秀樹がそう言っている場面を見て、私は「はっ」とさせられた。お好み屋のマスターの話聞いていた筈の私は、いつしか夢の中にいるような感覚に陥り、それでいてはるか秀樹達とその登場人物となっているのが妙にリアルで、まるで映画館でドキュメント映画を観ているようでもあった。

その映画館では自分の意識が妙に希薄(きはく)で、魂だけがそこにいるような感覚とでも言おうか...いや、それよりももっと身近で、はるか秀樹の守護霊にでもなったかのような感覚というのが正確かも知れない。

マスターの話は、過去の出来事の説明にしか過ぎないはずなのに...その場に居合わずかのような臨場感(りんじょうかん)は何なのだろう。

とにかく、未知の世界での霊魂になったかのような立場の客観的自分の意識が、たまに強く出る時があって、それは自分の知ってる話や知識が、未知の世界にいるはずの世界で繰り広げられ驚いたりする時が、特に顕著(けんちよ)であった。流巖と純柄の事件は、私もニュースで確かに見ている。だが、秀樹の言葉を聞くまで完全に記憶から消えていた。私の記憶から完全に消えていたというよりは私の生きている社会からも、そんな事件は秀樹の話を見るまで消されていたと思う。

平たく言えば、あったはずなのに無かった事になっていて、その改ざんを何者がしたのかもわからない、完全犯罪と言ったところであろうか。それが解け、夢が現実か判らなく動揺する私の意識をよそに、秀樹達の戦いが幕を明けようとしていた。

「じゃあ、あの獣は人間なの？」

「もうアイツに人としての命はない。生きてた頃から悪さばかりしてたから、心が腐ってた。心の醜い人間なんて人間じゃない。まあそんなヤツらだから魔獣の生贄になるんだろうが...とにかくあの魔獣は化物である証拠に、不死の体を維持する為に人間の血肉を喰らう。そして、幽畏はその苦痛に喘(あえ)ぐ人間の魂を好物としている、どちらも最悪のヤツらだ。手加減するな。」

「うん。分かった！！」

「数千年前、ヤツらを封じた三種の神器(じんぎ)と謳(うた)われる、天業雲剣(あめのむらくものつるぎ)というのが、火聖剣の異称だ。ヤツらと戦ってく内に、何かヒントが見つかるんじゃないかと思うから。と言うか、この戦いはそれを見出さないと分が悪いと思う。気を抜くな。」

「うん。」

「グオオーン!!」

双頭の魔獣の全身からトゲが生え、額には野太い角が突き出し完全体となった一ツ。

「はるか。やられる前にやるぞ。」

「うん!!」

二人はそれぞれ剣を手にし、二手に別れて幽畏と魔獣に切りかかったツ。

ガシャーン!!

「小童、お前の力はその程度か？」

幽畏は秀樹の振り降ろした刀を、大きな鎌で軽々と受け止めたツ。

「くッ。なんて力だ...」

あべこべに押し返された秀樹。バランスを崩して地面に激突しそうになったが、すんでの所で気付いたはるかが、魔獣への突撃を変更して助け出したツ。

「大丈夫？お兄ちゃん。」

「ああ...すまない。」

「不甲斐(ふがい)ない小童よのお。女子(おなご)に助けられおって。二人まとめて、この 霊枯之大鎌(たまがれのおおがま)の餌食にしてくれるわツ。来いッ!死身狛犬(ししんこまいぬ) 矢孤禅幽仁昆(やこぜんゆにこん)!!」

「ガオオオオーン!!」

幽畏が巨大な魔獣の背に乗り、襲いかかって来た一ツ!!

「喰らえッ。呪怨黒波動(じゅおんこくはどう)!!」

猛突進する幽仁昆の背中から繰り出された霊枯之大鎌の攻撃は、互いのスピードが合わさると閃光(せんこう)の速さとなって無数の刃がはるか達を襲ってきた一ツ。

「人中極咲疏心剣法(じんちゆうきよくしょうそしんけんぼう)!!」

はるかが先に飛び立ち、嵐のごとき乱撃をくい止めたツ。

「オクトパスビート(8連重水撃)!!」

その背後から秀樹が翔けてきて、幽仁昆に斬りかかるツ。息の合ったコンビネーションから、一瞬にして幽畏の元へと詰め寄ったはるかであったが...

「くッ、重い...!」

はるかの体のあちこちに黒い斑点(はんてん)が現れた一ツ。

「かかったな。」

バキッ!!

「きやあああー...!!」

急に体が重くなり、動きの鈍くなったはるかに向け、振り下ろされた霊枯之大鎌。常人なら命を断たれる程の一撃も炎の内力(メキド)で覆われ、高い防御力を持っていたお陰で、致命傷は免(まぬが)れたが、空中から地面に叩きつけられたッ。

「はるかッ！！」

「グオオオオーン」

一瞬、気を取られた秀樹を、幽仁昆の鋭利(えいり)な爪が襲うッ。間一髪でそれを躲(かわ)し、反撃した秀樹だが...

(くッ、斬っても斬っても再生しやがって。これじゃキリがない...)

戸惑う秀樹に、幽畏が幽仁昆の頭上から迫り攻撃を仕掛けたッ。

「はははッ。死ねえい！！」

「貴様、はるかに何をしたッ!!」

「知りたいか？ならば貴様も喰らえい！！」

防戦一方の秀樹に、霊枯之大鎌が妖しい光を放ったかと思うと、大きく孤(こ)を描き、肩口から斜めを一刀両断にしてきた一ッ。

「こっ、これは！？」

かろうじて斬撃(ざんげき)自体はかわしたものの、風圧を受けた秀樹の体から、はるかと同じ黒い斑点(はんでん)が現れた一ッ。

「死ねッ、葬業死帝弦月連刃(そうごうしていげんげつれんじん)！！」

三日月型をした鎌から、無数の風の刃がひっきりなしに秀樹を襲うッ。体の重くなった状態では防ぎきれず、吹き飛ばされた一ッ！！

「ぐはッ!!」

「お兄ちゃん！大丈夫？」

深手を負った様子 of 秀樹を、気づかおうとしたはるかが悲鳴を上げた。

「きゃあーッ!!」

「ぐッ...ど、どうした...？」

「お兄ちゃんの顔から...血が...。」

「...参ったな。でも、この黒い物体の正体が分かったぞ。」

「お兄ちゃん...傷が...」

すっかり動揺してしまっているはるか。そこに、幽仁昆の鋭いツメが牙をむいてきたッ！！

「危ないッ、はるか！！」

秀樹の叫びに正気を取り戻したはるか。直撃寸前の所で、幽仁昆の攻撃を受け止めたッ。

「はるか、聞けッ！黒い物体は死霊(しりょう)のような物で、一種の憑依(ひょうい)現象を用いて、運動機能を低下させている。全力で炎を噴射(ふんしゃ)させ、吹き飛ばせッ！！」

「わ、分かったわ！！」

フル出力で暴発させた炎。刃を交わしていた幽仁昆が、その勢いに前足を弾き返されたッ。

「何いーッ。我が眷属、苦冷面吐(クレメント)を弾き返しただとおッ！？」

「はるか、行くぞッ！！」

「はいッ！！」

体勢を崩した幽畏達。はるか秀樹が翔け上がると、水しぶきを炎が照らし出し、空中で二人が交差すると、光が乱反射して、幽畏達の目が眩んだーッ。

「ブリリアントアクアマリン[藍王焔連撃]！！」

「ザンライスバースト[燦炎焔乱撃]！！」

神速の太刀筋から放たれた斬撃(ざんげき)は、炎と水のオーラが乱反射して入り混じり、幽畏と幽仁昆の目を眩ましつつ、体を引き裂いては燃やし、再生の猶予(ゆうよ)を与えない程の勢いであったッ。

「ぐおわあーッ！？」

「グオオーーンッ！？」

苦痛に悶(もだ)える幽畏と幽仁昆に、トドメを刺そうと一斉にはるか秀樹が接近してきたッ！

「お願いですから助けて下せえ!!」

「あッ！？」

はるかが幽仁昆にトドメを刺そうとした瞬間、それは起こった。幽仁昆の片方の顔の鼻筋から眉間にかけての部分に、純柄の顔がいきなり生えてきたかと思うと、命乞(いのちご)いをしてきたッ。

「はるか、ためらうなッ！！」

秀樹の忠告は間に合わなかった。戸惑い、攻撃の手を休めてしまったはるか。幽仁昆と純柄が「シメた！！」と言わんばかりに、汚らわしい笑みを浮かべ。はるかは「しまった！？」と思ったが、時すでに遅く死角から飛んでくる尻尾に、思いきり殴打(おうだ)されてしまった一ツ。

バキッ...

「きゃあああー...!!」

激しく大地に叩きつけられた一ツ。

「はるか一ツ！？」

「ヤりましたよ、幽畏様。見ててくれましたか？グヘヘヘ。」

「はははッ。でかしたぞ幽仁昆よ。」

「貴様あー...許さん！...!!」

「おっと、そちの相手はわらわじゃ。」

幽仁昆への報復(ほうふく)をしようとする秀樹だが、幽畏に牽制(けんせい)されどうにもならず、あべこべに霊枯之大鎌の攻撃に先を取られ、受けに回ってしまい身動きが取れないッ。

「うう...ううう...」

「幽仁昆よトドメを刺せえい！！」

「はっ。それにしてもこの娘は美味そうだなあ...グヘヘヘ。」

純柄の顔が幽仁昆の中に再び消えると、はるか目掛けて急降下しはじめた一ツ！！

「グオオオオーン...!!」

「はるか一ツ！起きろおおお!!」

「ふっ...ふはははッ、早くその美しい娘を引き裂くがよい！！」

朦朧(もうろう)とするはるかの意識。秀樹達のやりとりが夢のように見えている。そんなはるかに、ドコからか別人の声がはっきりと語りかけてきたッ。

「そなたの名は？」

(?...私は...はるか...あなたは?)

「イザヤ。」

(えっ???)

「またの名を“いぎなぎ”。炎の御子(みこ)よ、よくぞ参られた。」

(私...化物と戦ってた筈なのに...負けちゃったの...?)

「まだ戦いは終わっておらぬ。そなたは気を失い、炎の懐(ふところ)に抱かれた。」

(...ここは...天国なの...?)

はるかがそう感じたのも無理はなかった。光り輝く世界。はるかの意識だけがその世界に入っている。ドコからともなく響く声は、言葉や音で表現されている物ではなく、直接心に響いているような感覚であった。その不思議な感覚が、はるかに自分が死んだと錯覚させていた。

「天国か...形なき魂の世界。そなた達の世界で言う所の天上の世界。正しく今、そなたの心はその“世界”にいる。」

(私、死んじゃったの...?)

(死んではおらぬ。だが、このままではそなたの肉体は滅ぶ。)

はるかの意識に、別世界にいる自分の体が、幽仁昆に襲われている映像が映し出された。

(やっぱり私、助からないんだ...)

「案ずるな。今よりそなたに我が力を授けよう。」

(力...?)

「そなたの求めた力じゃ。受け取るがよい。」

はるかの意識に、十字架を型取ったような紅の光りが入り込んできた。

(!?これは...火聖剣...?)

心にダイレクトに入り込んだその光が、火聖剣に関する詳細を一瞬にしてはるかに認識させていた。

(我が血族の末裔(まつえい)よ。また会おう...)

(待って...!!)

意味深な言葉を残し炎は去った。と同時に、はるかの意識も自らの肉体へと戻り、天国のような世界が消え去った。

「な、なんだこの光は...!?!」

はるか意識が戻ると、神々しいまでの光が体中から溢れ出し、幽畏と幽仁昆をのけ反らせ、退き下がらせた！！

「はるか、その光は...!?!」

「お兄ちゃん、心配かけさせてごめんなさい。火聖剣は手に入れたから、あの魔物達は私が倒すッ！！」

そう言っはるかが上空の幽畏達を見上げると、さっき意識の中に入ってきた十字型の光が現れて燃え出し、鏢(つば)に長い羽をあしらい、身の丈ほどもある刀身をした大剣に変化した一ツ！

「ぬうう一ツ。小癩(こしゃく)なあ一ツ...!!」

凄まじき爆風に腕をかざして目を覆い、踏んばっている幽畏が奇声をあげたッ。

「馬鹿な...!?!」

怒りを剥(む)き出しにしていた幽畏だが、火聖剣の脅威(きょうい)を垣間見て、自分の足が震えているのを見。経験した事のない感覚に戸惑い、思わずそんな言葉をもらしていた。

「何じゃ...これは!?!」

「それが恐怖という物よ。死国嘔女！！」

「うぬうあ一ツ。許さぬぞ貴様ア！！妾(わらわ)にこのような屈辱を与えおってえー。殺してやるッ！！」

「自分のしてきた報いを受けなさいッ！」

「うるさいッ！！開けッ、地獄門、魔瑠奈伽(まるなか)！！」

ブラックホールのように渦巻く漆黒の空間が空に現れ、そこから無数の魔物が出現したッ。

「苦冷面吐(クレメント)どころではないぞよ。見よ！地獄の深くにおわす、この錚々(そうそう)たる魔王達の顔ぶれを！！」

「灼き尽くすッ！！」

「ほざけッ。くらえ！ 死帝無限地獄行(していむげんじごくこう)！！」

漆黒の門よりとめどなく溢れ出す魔物達。それらが一斉にはるかに攻撃を開始したッ！！

「メテオドライブ[煌流星炎破]！！」

胸の辺りから両手に持ち掲げた火聖剣を「くるっ」と横倒しさせ、千葉ロッテマリーンズのズレータの打席のような構えをとり。持ち手を交差させるや否や、蹴り出した右足が幽畏の方へ向くと、交差した手首を返して、刀が地に水平の状態から斜め上段を指し袈裟斬(けさぎ)りの格好となると、そこから無数の燃えさかる流星群が飛び発った一ツ。

ドウゴオオオー...

はるかの繰り出した流星群は、数もさる事ながら、幽畏の技の威力を凌(しの)ぐその圧倒的熱量は、まるで限りを知らず噴出する溶岩のように、一本のドデカイ柱状に注がれ暗黒の地獄門をパンクさせた一ツ！！

「何ィーッ！？ぐわあぁー...!!」

同一線上にいた幽畏達も、その炎の渦に巻き込まれた一ツ！！

「ぐはッ...そんな馬鹿な...!？」

「まだ立ってられるの？ホントにタフね。」

かなりのダメージを負っているようだが、かろうじて幽畏は堪えている。徳島を支配していた王としてのプライドだろうか。かなりの深手の筈なのに倒れず踏ん張っている姿に、はるかは動揺している様子であった。

「はるか！」

「お兄ちゃん!？」

「お前の真上を見てみろッ！！」

「これは...!？」

はるかの頭上に大きな青い光を放つ球体が現れていた。

「マーキュリー[水素原子母体]。俺の力を集めた物だ。それにお前の力で熱と圧力を加え、核反応させ奴等にぶつけろッ！！」

「えっ！？そんな…」

「今のお前の力なら出来る筈だ。やり方は前にも教えてあるだろ？奴らは不死だ。だが、原子レベルまで破壊されてしまえば、おそらく生存できまい。早くやれッ！もう再生してきてるぞッ。」

「分かったわッ。フレアプレイス[火焰炉]！！」

マーキュリーの周りを炎が循環(じゅんかん)しだしたッ。

「おのれえーッ。させるかーッ！！」

瀕死(ひんし)の状態から回復しきってはなかったが、幽畏が最後の反撃を仕掛けてきた。しかし、その最後の抵抗に移ろうとした頃には、核反応を完了したマーキュリーが、蘇芳(すおう)に染まる日輪(にちりん)の如く、燦々(さんさん)と輝きを放ち出し飛び立っていた一ッ！！

「アメシストプロミネンス[水素核融合爆焰光波]！！」

「ぎいいーやああああー…!!」

振り向き様を襲う光弾に、防ぐ手立てもなく大爆発に晒(さ)された幽畏。狭い範囲に限定されていたようであったが、その威力は発光の度合いを見るからに言語を絶するほどの激しさだ一ッ!!

「倒した…!?!」

「ああ。よくやったな、はるか。それにしても今の技は凄い熱量だったな。」

「うん…。えっ!?!」

「どうしたんだ？」

「お兄ちゃんの…後ろ…！」

幽畏達が爆死し、静寂を取り戻した境内(けいだい)に佇(たたず)むはるかと、彼女に向き合う秀樹。それからずっと後方に位置する神武天皇像(じんむてんのうぞう)。その像のすぐ上部にいる鳥像が、本物の鳥となりはばたき出した。

「あっ！？あれは神鳥！」

「神鳥？」

「神武天皇(じんむてんのう)東征(とうせい)の際、道先を案内したという“金の鳶”。燃えさかる炎の色合いを黄金の光に例えた所から、その名が付いた。またの名を“神鳥”とも言うんだ。」

「そうなの...」

「はるか、気付かないか？」

「えっ!？」

「金の鳶の金色とは炎の色合い。それが神武天皇達を導いた。俺達を導いた火の柱と似てるとは思わないか？」

「そう言われると形が違うだけで同じ物ね。」

「“不死鳥”という固有名詞が付くまでは神鳥と呼ばれていた炎。それが金の鳶という形容をされたのは、もう一つ意味があるんじゃないかなと思うんだ。」

「どういう事？」

「金というのはただ単に炎の色を表現したんじゃないと思う。炎を色として例えるんなら赤みを強調するはずじゃないか？普通に考えるなら。」

「私には分からないな...。」

いつもクールで頭の切れる秀樹の洞察力(どうさつりよく)と、思考の速さにはるかはついて行けてないようであった。

「炎の不死鳥、炎の柱、金...そうか!!」

「何か分かったの!？」

「ソロモン王の秘宝は、三種の神器と言われるように三つあると言われてる。それらが形を変えた姿が、いま言った三つの物なんじゃないだろうか...。」

そこまで言うと、秀樹が考え込み出し二人の会話が止まった。

「あっ!？お兄ちゃん。」

「ん、どうした？」

「後ろ...。」

秀樹が振り返ると、生命の息吹を得た金の鳶の像が遠くへ飛び去っていった。

「何処へ飛んでったのかしら？」

「さあな。確かな事は言えないが、お前がメテオカリバーの封印を解いたのが原因と仮に考えれば、ソロモン王の秘宝に関連する事だと考えるのが妥当じゃないか。」

「どういう事なの？」

「師匠が言ってただろ。炎の剣が秘宝の謎を解く鍵だって...火聖剣が現れて、神鳥が現れたいきさつから察すればな。」

「そっか。」

「とりあえずここでの修行は終わったし、帰るか。」

「どうやって？」

「茅(ち)の輪さ。アレをくぐれば元の世界に戻る。」

「そうなんだ。」

「おいおい、ホッとするのはまだ早いぞ。本番の戦いはこれから始まるんだ。いいな！今度は気を抜くなよ。」

「うん、分かったわ。」

激闘が終わったばかりであったが、肩ならしと言わんばかりの二人の会話。それは高熱にうなされる沙織の容態を、お互いに意識しての物であった。元の世界で、一体何日が経過したのかは分からない。沙織の体力の消耗を考えると、それが深刻になり二人を緊張状態にさせた上での発言。駆けつけた功一が二人の雰囲気を見て、早とちりして止めに入った。

「今、行っちゃヤバいっすよ！秀さん。」

「何がヤバいんだい？功ちゃん。」

「チャン・リンシャンとの戦いっすよ。はるかちゃん疲れてるじゃないっすか。」

「ヤバいって功ちゃんの口癖になっちゃってるね。心配しなくても休ませてから行くから。俺とはるかもちよっと焦ってるから誤解させちゃったね。」

「そうっすか。...すみません余計な事言って。」

「いや、気を遣(つか)ってくれてありがとな。」

「功一先輩、お世話になりました。」

「はるかちゃん...」

「一休みしてから沙織を助けに行ってください。陽一さんにも宜しくお伝え下さい。」

「うん、分かった。頑張ってるね。」

「はい。」

—その夜—

「お兄ちゃん。」

「なんだい？」

「体力はもう回復したわ。何時、決着をつけに行くの？」

「そう慌てるな。今、帰っても元の世界はまだ明るい。真っ昼間からやり合うのもマズいだろ？今はゆっくり休んどけ！」

「...うん。」

功一が去り、二人きりで焚火(たきび)を囲うはるかと秀樹。来たるべき決戦を前にしての僅(わず)かばかりの休憩の時間に、長い緊張状態から開放されたはるかだが、また違う種類の緊張感に彼女は心を躍らせていた。

「...お兄ちゃん。」

「どうした？」

「...こうやってお兄ちゃんとゆっくりできるのって久しぶりね。」

「ああ、そうだな。昔は、よくこうして一緒に修行したもんだけどな。」

「...そうだね。」

「どうしたんだ？何か今日は変だぞ。」

「ううん。何でもない...っていうのは嘘。なんか私もお兄ちゃんも他のみんなも、少しずつ変わってくんだなあって思って...。」

「そりゃーまあ...そうだな。泣き虫だったはるかが、こんなに強くなったんだもんな。」

「もおー、それは言わないでよ。」

「ハハハハッ。」

人は時間と共に変わっていく。自分自身やその周辺の者達も。一日や二日で急に訪れる訳ではないのだが、それぞれの道へと進んでいく中で、いつの日か別れる日も来る。目には見えない未来。とりわけ兄のように慕(した)い、大好きな秀樹と疎遠な状態が続いている事が、いつの日か訪れる別れを連想させ、その切なさをはるかの中で想像以上に大きくしている。

そんな先の事を考えてもしょうがないのだが、血を分けた家族のいないはるかが、そういう事を考えるのは無理もない事なのかも知れない。

身内のいないはるかにとって、秀樹達こそが家族としての心の寄り拠であろう。だが、彼らもいずれは家族を持ち離れてしまう。現段階でも、踏み込んだ悩みや心の問題全てをぶつけられる程ではない。はるかの性格からしても遠慮して依存はしきれない。

そういう意味では、物心ついてからの彼女はずっと孤独であったのだ。

「いつか皆、色んな所に行ってバラバラになっちゃうのかなあ。沙織に正友、おじいちゃん、それに...お兄ちゃん。」

そこに覗く乙女心。

「俺はずっとここにいる。だから俺に会いたければ、いつでも会いに来ればいい。」

「...うん。一つ訊いていい？」

「なんだい？」

「お兄ちゃんは徳島が好き？」

「どうだろうな...でも嫌いじゃないな。ここは俺の愛した女の生まれた地だから...何でそんな事訊くんだい？」

「まゆみさんをまだ想ってるんだね。」

「えっ!?!...まあな。それよりお前、俺の質問に答えてないぞ。」

「えっ!?!...ああ。皆、故郷ってどうなのかなあなんて思ったから。」

「皆と離ればなれになるのが寂しいのか？エラく後ろ向きな考えだが、そう聞こえるぞ。そんな事、そうなった時に考えたらいいんじゃないのか？」

「うん...。」

「まあ沙織ちゃんは分からんが、正友と俺は徳島にずっといると思う。」

「...なんで？」

「アイツは俺といるのが楽しいらしいから、俺の近くでいたいって言ってたからな。俺はココを離れる気はないし。」

「そうなの!？」

「ああ。だからお前も他所に行くのが嫌なら、ずっとココに居ろよ。そしたら俺たちはずっと一緒だ。」

「うん。」

はるかとはとても嬉しそうな顔をした。秀樹は不器用で女心の分からない鈍感な男であったが、頭は切れ、同性からは好かれるタイプ。寂しげにしているはるかの深層心理までは読みとれないでいたが、言葉じりから不安だけは察し、取り除くように優しい言いまわしをしていた。

「もう一つだけ訊いていい？」

「ああ、いいよ。」

「まゆみさんとはどうして別れたの？」

「それは...いずれ明らかになるよ。」

「??？」

「それ以上は今とは言えない。」

歯切れの悪い返答に、はるかは思わず踏み込んだ問いかけをしてしまった。

「もしかして秘宝と関係があるの？」

「...。」

秀樹はどう言っているのか困ったという顔をした。

「当らずも遠からじって事にしようか。」

煙に巻くように、そう言って秀樹ははぐらかした。

「はるか、よく聞け。」

「えっ...何？」

「お前には特別な力が与えられた。そういう存在を中心にして新たな存在も現れる。光が生まれれば影ができるように。今まではお前が幼かったが故に、悪用されてはイケないと、俺達はお前という光を隠してきた。だが、もうお前は子供じゃない。これからは、自分の生きる道を自分で見定め歩いていってくれ。どんな困難があってもくじけちゃダメだぞ！」

「...うん。」

元恋人とソロモン王の秘宝の話が、いつの間にやら人生訓に変わっていたが、秀樹の話は決して筋を違えた物では無かった。

過去がそうであるように、財宝という物欲にかられた大人達の様々な陰謀(いんぼう)にこれから晒(さら)されるであろう、その鍵となる一人の少女の未来を案じての言葉。少女から大人へ。その階段を歩み出したはるかを心配しての事だった。しかし、それが何故、元恋人との話と結びつくのか、それがはるかには判らないでいた。

第5章 鍵 END

次章へつづく

バトルボーラーはるか
第一集 バトルボール(神気珠玉)
第5章・鍵（後編）

<http://p.booklog.jp/book/57348>

著者：Ψ（**Eternity Flame**）英 樹 （はなぶさ いつき）
著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/eternal-spirit/profile>
ブログ：<http://profile.ameba.jp/jimmd123/>

編集：Ψ（**Eternity Flame**） 秋乃空（あきのそら）
ブログ：<http://profile.ameba.jp/battleballer-haruka/>

感想はこちらのコメントか秋乃空のブログへお願いします
<http://p.booklog.jp/book/57348>
(上記のブログでの受付もできます)

ブックログ本棚へ入れる
<http://booklog.jp/item/3/57348>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）
運営会社：株式会社ブックログ